博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	磯野　真穂
論　文　題　目	医療の語らなかった摂食障害－摂食障害の食の文化人類学的探求－

審査要旨

本論文は５部立て、14章の構成となっている。論文では、文化人類学の立場から、現在の摂食障害医療を支える理論に鋭い批判を加え、その弱点を補てんするための代替理論を提示し、さらにそれに基づいた回復方法を提言し、結論としている。

摂食障害は、長期にわたる自発的な拒食や過食および過食を相殺するために行われる嘔吐や下剤の乱用などに特徴づけられ、精神疾患の一つとして一般的に認識されている。第Ⅰ部において、磯野氏は、研究の方法をまず解説し、続いて過去の主要な摂食障害研究を、分子生物学から哲学まで幅広く概観し、それら研究の底辺を流れる理論的まなざしを、まず二つの大きな流れに独自に分割し、それぞれを「本質論」、「生体物質論」と名付けている。「本質論」は、「摂食障害の本質的な問題は、食とは直接関わりのない心理的な部分にある」というものであり、「生体物質論」は、「摂食障害に見られる食の問題は、飢餓状態および、摂食障害に対する生得的な生物学的脆弱性から生じるとするものである」とするものである。さらに、磯野氏は、「本質論」も「生体物質論」も着目する領域は異なるものの、拒食や過食という現象を引き起こしていると考えられる、いくつかの心理的要因や、現象そのものの発現に関わる、いくつかの生体物質に現象を還元することで問題を理解・解決しようとする点で立場を共にするとし、「本質論」と「生体物質論」を統合する理論的まなざしとして、「還元主義」という用語を新たに提起している。

第Ⅱ部において磯野氏は、約3年間にわたり研究に協力した6 名の摂食障害の当事者のうち、過食および嘔吐、下剤、もしくはチューイングを行う5名の方の摂食障害の経験を、約3年間に及んだインタヴューをもとに、紹介している。

第Ⅰ部と第Ⅱ部を踏まえ、磯野氏は、第Ⅲ部において、「還元主義」を批判する。まず磯野氏は、「還元主義」と協力者の経験を比較し、それに一定の評価を与えつつも、同時に「あらゆる人を例外なくこの枠組みに回収してしまう」という問題点があることを指摘する。「還元主義」は、人間関係のトラブルといった、人であれば誰でも抱えているような生活上の問題を、拒食や過食といった状態の契機と見なすため、本人がこれら問題を解決していったとしても、同様の問題を新たに発掘し、それが症状の契機であると見なすことができる。このため、「還元主義」は、生活上の問題と、拒食や過食との明確な相関関係なしに、拒食や過食といった状態が続く人すべてを、内部に取り込んでしまう恐れがあるとする。 続いて磯野氏は、「生体物質論」において、回復のための 1 つのアプローチとされる生理・栄養学的な知識の取入れが、むしろ食に際して現れる多様な体験を押し殺すような身体感覚を生み出していること、また「本質論」において、しばしば注目される当事者の両親の問題を、当事者自身が深く分析することと、食に見られる問題の解決は必ずしも平行しないことを指摘し、当事者の語りをもとに示し、「生体物質論」と「本質論」に対して、批判的な視線をそれぞれ投げかける。

第Ⅳ部において、磯野氏は、「還元主義」においてほとんど着目されていない、過食や拒食の渦中の主観的な体験や、食べ物に対する捉え方に着目し、摂食障害をこのように分析する方法を「現象主義」と名づけ、「現象主義」に基づいた摂食障害の分析方法の一例を紹介する。磯野氏は、過食排出行動がなぜ爽快感をもたらすのかを、その方法、その渦中の身体感覚と感情、および過食排出行動に従事する当人の「内的な時間」（＝主観的に感じられる時間の流れ）に着目をして分析した。磯野氏は、ミハイ・チクセントミハイのフロー理論と、彼女たちの経験を照らし合わせ、彼女たちは、それぞれの試行錯誤において、過食排出行動そのものにある種の「楽しさ」を見出せるような過食排出行動の方法を、皮肉にも確立させてしまっていることを示した。すなわち、過食排出行動を継続させる要因は、過食排出行動の外部だけではなく、内部にあることが示唆されている。

第Ⅴ部において磯野氏は、これまでの議論を踏まえて、摂食障害を理解するうえで、人間の食および社会や文化という概念において医療者がしばしば犯す誤謬を指摘し、さらに摂食障害の当事者に向けて、回復のための方法を提示して

いる。まず、磯野氏は、「なぜ拒食や過食排出行動は病気と見なされるのか」という「還元主義」が自明のこととしていた前提を問い、食をとりまく思想や行動は、そのすべてが本能によって統制されるものではなく、社会化の過程で共同体を育むことができるような形に調整された、社会性のすこぶる高い行動であるハビトゥスであると指摘する。そして、摂食障害の当事者から、食のハビトゥスの流出が見られることを指摘する。続いて、磯野氏は、摂食障害の治療や研究に携わる医療関係者が、社会や文化を人からとり払うことが可能であり、それらをとり払った後に個々の多様性が現れるという、文化人類学的には誤った見方を強固に保持していることを指摘し、このようなまなざしは、患者に悪影響を及ぼしかねないことを指摘している。そして最終章では、科学的な知識が、本人が生きながらえてきた体験の価値を希薄にする可能性があることを自覚すること、また、病気の意味づけにおいて重要なことは、「ほんとう」の原因は何なのかを探し求めることではなく、病気によって社会からいったん逸脱してしまった自己をいまいちど社会に統合することであること、そして、志向性（＝自らの心が何かを指し示す状態）に誇りを持ち、身近な他者を手本として、食に社会的な命を育む力をゆっくりと取り戻していくことが回復への一つの方法であることを示している。

審査委員会では、論文の論理的な妥当性、資料収集の妥当性、そして結論の妥当性に主に焦点を当て、審査を行った。委員会では全体の意見として、重要な問題提起をはらんでいること、今までになかった文化人類学からの新しい知見をとり入れていること、さらに、協力者との信頼関係を築く際に、多くの困難があったことが予想される中、それを成し遂げ、それぞれの当事者一人ひとりの立場から議論を組み立てた点が高く評価された。また、論文が応用人類学の立場をとっているため、従来の文化人類学の殻を破り、学問の幅を広げるものであることも高い評価の対象となった。

ただ委員の間では、問題点も指摘された。その第一は、従来の固定的な摂食障害の考え方、治療法に批判的に対応する論文であるにもかかわらず、論文の最初の部分で摂食障害が「精神疾患」であるという枠組みを無条件に受け入れているように見受けられる点、第二に「還元主義」が、筆者の独自の概念であるにもかかわらず、「還元主義」と呼ばれる理論的思考方式が、以前から医療に存在しているような言い回しがしばしば見られる点、第三に還元主義の当事者である医療関係者が陥りやすい誤りをよく見抜いているが、同時に治療の現場で行っている努力についてもう少し気を配る必要があること、そして第四に、協力者が6人と限られているにもかかわらず、それを超えた部分に対しても一般化を行っているように受けとることができる点に、疑義が出された。これに対して、磯野氏からは、指摘された点は、今後出版物として発表してゆく段階で改良することが述べられた。

こうした問題点は出されたが、本研究で提示された論点は、医療によって今まで指摘されることのなかったものである点で、摂食障害医療における新しい見地を開く可能性を持ち、さらに、提言にとどまっているが、実際の治療の方法まで踏み込んだ意欲的なものである点で、当事者に希望を与える可能性が高く評価された。審査委員会では全員一致して本論文が博士の学位を授与するにふさわしいものとの結論に達した。また多くの委員から、医療関係者をいたずらに反発させないよう、文言を変えるなどして、一刻も早く出版することが望ましいという意見が出たことを付記しておく。

公開審査会開催日	2010年　4月　24日		
審査委員資格	所属機関名称･資格	博士学位名称	氏　名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院･教授	Ph.D.（ﾐｼｶﾞﾝ大学）	西村　正雄
審査委員	早稲田大学文学学術院･教授		小沼　純一
審査委員	早稲田大学人間科学学術院･教授	博士（人間科学）早稲田大学	蔵持　不三也
審査委員	早稲田大学人間科学学術院･准教授	博士(医学)　東京大学	辻内　琢也
審査委員	お茶の水女子大学･名誉教授	Ph.D.（テキサス大学）	波平　恵美子